

## 〈身〉の医療研究会 発足によせて

福永 幹彦（関西医科大学心療内科学講座）

〈身〉というキーワードを、心身医学の分野で紹介されたのは、このたび特別講演をされた、私の恩師、中井吉英関西医大名誉教授です。〈身〉の詳細については、特別講演の稿で触れられるでしょうが、私なりに、この言葉を考えてみたいと思います。「身体」とか「からだ」とか、「こころ」とか「精神」と言ってしまうと、言葉にした時点で二分論的思考に支配されてしまい、そのあとにこころと身体はわけられないと続けても、どこかしらじらしく感じてしまいます。概念としては分離してしか理解不能であり、論理的思考にとって心身分離は必要であると、まず宣言したようなものだからではないかと思えます。

〈身〉という言葉は、身体に重きをおくようであり、重層的な意味をもち、その核、または先端の部分に精神性のある部分を包含したようなものといえるでしょう。「身体」と「精神」を包括する概念ではなく、それぞれと重複するものの全体を含まず、いずれとも異なった意味が生じています。この言葉は現在も日常的に使われており、その使用時の意味づけを振り返って見たとき、上記のようなことに気づきます。なるほど一元的な言葉も概念も存在するのです。

しかし同時に〈身〉は、日々のありふれた生活に密着した用法しか無く、〈身〉を用いてこころやからだのそれぞれに意識をむけるといった使い方はできません。そうしたいときには使用できない言葉でもあるのです。

たとえば適切かどうかこころもとないですが、身体医が身体医として患者さんを助けたい、または苦しみを少しでも和らげたいと誠心誠意自らの

本分を尽くす時、そこに〈身〉はあらわれ、こころも身体も救いたいと考えたときそこに〈身〉はあらわれないということではないかと思うのです。これは心身医学にとってきわめて深刻なパラドックスとなります。

心身医学を志向する医師は、二元論を克服した存在ではなく、心身二元論の世界に深く身を沈め、心身相関の専門家として活動しながら、身体をとおしてこころの存在を感じることで、高い次元の〈身〉の医療を意識し、あこがれながら努力している存在だと思うのです。

以上は〈身〉に関する、まったくの私見ですが、心身一元論は私の留学中の研究テーマでもありましたので、研究会の発足にあたり、一文を寄稿させていただきました。  
(教育講演 座長／司会)

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<http://ratik.org>

